
ネーデルラントの覇王

もりそば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネーデルラントの覇王

【Nコード】

N2826BA

【作者名】

もりそば

【あらすじ】

ハルケギニアに古くから伝わる始祖の血脈3大王家、ガリア・アルビオン・トリステイン。

この物語は、その3大王家に連なる”火の国”ネーデルラント王国に誕生した覇王の生涯を描いたものである。

ラファエルと魔法（前書き）

処女作にて、文才に乏しい表現が多々ありますが、お許しを。

ラファエルと魔法

生後3ヶ月で言葉を話し始めた。その数週間後には、自我を持っていた。

やがて、1年が経つ頃には、自分の足で歩き、さらに自分の要求を明確に主張していた。

周囲の大人たちは彼を神童と呼び、「我が国の将来は安泰だ」と口々に言った。或いは、「始祖の再来だ」と持て囃した。しかし、彼はあくまでも冷静であった。周囲の評価など、齒牙にもかけなかった。

ハルケギニアでも珍しいオレンジ色の髪と、淡いエメラルドの瞳を持つ彼の名は、ラファエル・トビアス・マウリッツ・ファン・アルデルヴァイレルト。火の国ネーデルラント王国アルデルヴァイレルト王朝、ミカエル・ヘンドリック・ヨハネス（ヨハン一世）の第一子である。この物語は、ブリミル暦6230年、ラドの月・ヘイムダルの週・ユルの曜日。彼の3歳の誕生日から始まる。

――――

「お父様、魔法を覚えたいのです。」

「なんだと？・・・ラファイ、先週お前に誕生日プレゼントは何が欲しいのか考えておきなさいと言ったな。それが欲しいものというところか？」

「はい。ですから、杖と魔法を教えてください家庭教師をお願いします。」

「ラファイ、私は、おまえが普通の子供ではないということを十分に

理解しているつもりだ。しかし、魔法というものは使い慣れるまでは、とても危険なものなのだ。おまえはまだ3歳になったばかり。いくらなんでも早すぎる。せめて、あと1年待てないのか？」

国王の心配は尤もだった。ここ、ネーデルラントはトリステイン程ではないが、やはり魔法に対する依存度は強く、従って子供が魔法を学び始めるのも早い。それでも、早い子供で5〜6歳からだ。通常、3歳の子供など、まともに会話も成り立つかどうか、という時期である。ルーンの習得など不可能であり、魔法を学ぶにはあまりにも早い。

「父様が仰られる通り、魔法とは慣れるまで危険なものです。しかし、それであれば年齢の問題ではなく、習得し始める時期はいつでも危険なのではないですか？」

「う・・・む」

「まして、私はいずれ、この火の国の王となる人間です。それを他の人間と比較するなど意味が無いのではないのでしょうか？」

「ふう・・・おまえの言う通りだ。分かった。許可しよう。全く・・・我が子ながら、おまえは本当に3歳児なのか？」

「よく言われます。」

「まったく。ただし！・・・これだけは約束してほしい。お前一人のときには、絶対に魔法を使ってはならん！家庭教師はつけるので、それ以外の場では駄目だ！よいな？」

「わかりました！ありがとうございます、父様」

ラファエルが去った後、執務室ではため息を吐くヨハン一世と、宰相のヴィルヘルムス・ファン・デ・ケルクホフ侯爵が残って話をしていた。彼は御年60歳。男子が短命なハルケギニアでは異例の長寿ながらその高い政治手腕で、国王の右腕として国を引っ張る存在である。息子のヤン・クラース伯爵はアルクマール地方を統治しており、デ・ケルクホフ家は国を代表する名家である。

「ヴィリーよ。あれをどう思う？自分の子供ながら、将来が恐ろしいよ。」

「殿下ほど聡明な子供は、ハルケギニアに二人と居りますまい。陛下の心中お察し致しますが、我々としては殿下への期待が膨らむばかりでございますな。」

「ラファエルが規格外に賢しいことは私も充分理解している。しかしだ・・・立場を忘れ、只の父親としては、もう少し年相応に子供らしくして欲しいというものだ。」

またひとつ、大きなため息を吐く国王なのであった。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

ここは、王都ユトレヒトにある城内の書籍庫。古今東西の様々な書籍が保管されており、エルフの魔法書すらも存在する。あのトリステイン魔法学院の”フェニアのライブラリー”にも負けず劣らずといったラインナップである。ラファエルは1歳と半分を過ぎた頃、”イーヴァルディの勇者”などの絵本に飽きてしまった為―やはりその時にも深いため息を吐いていた―、この書籍庫の本を読む許可

を国王から得ていた。つまり、彼は2歳になる前に、既に文字を読み書きできる様になっていたということだ。このエピソードだけでも、ラファエル王子の異能ぶりが伺える。

「しかしまあ、始祖より魔法が伝えられて6000年以上も経過しているのに。未だに運用方法や教育の確立は成されていないんだな。この本には”魔法はイメージだ”と書いてあるが、こっちには”魔法は理論が全て”と書いてある。あっちの本は”魔法は才能で決まる”と書いてあったが、この本には”魔法は努力次第でどうとでも伸びる”か。どれも正しそうだし、どれも間違っているかもしれない。弱ったな。」

と言いつつも、口元がにやけているラファエル。手元には、現在では常用されていない、古代文字で書かれた魔法書がある。数ヶ月前から魔法書を読み込み、明日からついに魔法を学ぶことが出来る。昨日、父からワンド型の杖を贈られたが、その場で契約を終えてしまい、腰を抜かしそうになっていた。通常は早くて1週間、長いと1ヶ月以上もかかるそうだ。母は満面の笑みで褒めてくれたのだが。父様はどうも心配性でいけない。そう考えながらも、明日からの魔法の授業に対する期待からか、にやにやと笑みを浮かべる王子だった。

覇王の盾

翌日、エオーの曜日。

宮殿の中庭に呼び出されたラファエルの前には、国王である父と1人の女性が立っていた。背中まで伸びた金髪をひとつに纏め、長身と抜群のプロポーションが目立つ美女。歳の頃は20台後半であろうか。自分の母より、やや年上のようにだと推測できた。

「おはよう、ラフィ。昨夜はあまり眠れなかったのか？」

「はい、父様。興奮のあまりベッドに入ってから、なかなか寝付けませんでした。」

「はは、そうか。それだけ楽しみにしていた魔法の講義だが、教師を紹介する。ウルスラ。」

「はい。殿下、お初お目にかかります。ウルスラ・フォン・ランゴバルドと申します。」

「ラファエル・トビアス・マウリッツ・ファン・アルデルヴァイレルトです。宜しくお願いします。」

国王陛下から話は聞いていたが、予想以上に利発そうな言葉が返ってきたことに驚き、目を丸くするウルスラ。なにしろ、聞いている限りまだ3歳になったばかりの子供である。驚くのも無理は無かった。

「ウルスラは、今は亡きランゴバルド王家の一族だ。土のスクウェアメイジであり、魔法の腕はこのネーデルラントでもトップクラス

だ。何でも教わるといい。」

「陛下。御戯れを。私など、まだまだでございます。」

「謙遜するな。では、ウルスラ。私は執務があるので後は頼むぞ。
ラフィも、ウルスラの言うことをちゃんと聞きなさい。」

「御意にございます。」

「分かりました、父様」

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「それでは殿下、杖の契約は済んでらっしゃいますか？」

「はい、昨日父様に渡されたこの杖があります。」

「昨日ですか。では、杖の契約から始めましょう。」

「いえ、契約はもう済みました。」

「え？し、失礼致します。」

そんな馬鹿な。と思いつつ、一言断り、ラファエルにディテクトマジックをかける。王族に対し、ディテクトマジックをかけることは本来であれば不敬に当たるであろうが、杖が契約されているかは本人以外には、ディテクトマジックをかけるほか確かめる術はない。すると、確かにラファエル王子の持つワンドは、魔力の通りも良く、間違いなく契約は施されているようだった。

「た、確かに契約はされているようです。失礼ですが殿下。契約まで時間はどれくらいかかりましたか？」

「そうですね、大体15分程でしょうか。」

「じゅ・・・」

驚きを隠せないウルスラである。当然だろう、杖の契約には15歳でスクウェアメイジになった自分さえ、一週間はかかったのだ。これが規格外の天才というものなのか。

「あの・・・先生？」

どうやら驚きのあまり放心状態になっていたようである。陛下から直々に王太子殿下の家庭教師役を依頼されたのに。このままでは駄目だ。ウルスラは気を落ち着かせて、自分に言い聞かせたのだった。

「申し訳ございません、殿下。では、コモンマジックから教授させて頂きます。そういえば殿下、系統魔法とコモンマジックの違いはご存知でしょうか？」

軽い気持ちで質問したウルスラだったが、これが拙かった。

「はい。まず、詠唱に違いがあります。系統魔法は通常、ルーンの詠唱により精霊を行使し、魔法の発現を行います。コモンマジックは口語による詠唱になります。よって、系統魔法とは違い精霊を使役しない魔法になることで、精神力の消費に差異が出ます。また、コモンマジックというのは・・・」

ウルスラは、**脳筋**だった。

[illegible]

「レビテーション！」

ティーテーブルの上に置かれている紅茶のポットは、ゆつくりと注ぎ口を下向きに傾けられ、中の紅茶がカップに注がれていく。

「す、素晴らしいですわ、殿下……」

本来、このような細かい操作は浮遊の魔法ではなく、念力の魔法で行われるべきものだ。レビテーションは念力に比べ、重い物を運べる代わりに力のコントロールが難しい。例えて言うならば、バケツからカップに水を注ぐようなものだ。そんな難しい魔力操作を、いとも簡単にこなすこの少年。しつこいようだが、若干3歳である。

「それでは、本日はここまでに致します。淹れて頂いた紅茶でも飲みながら、少しお話を致しませんか？」

「有難うございました。勿論、いいですよ。」

数時間に渡る授業が終わった。本日はコモンマジックの点灯、施錠、開錠、念力、探知にドットスペルの風魔法・浮遊の講義を行った。講義といっても、魔法を見せて魔力のコントロールを教えてしまえば、勝手に覚えてくれてしまうのだが。これ程覚えが早く、論理的

に魔法を覚えようとする生徒は初めてだった。

ウルスラは、目の前の王太子に興味が湧いていた。類稀な魔法の才能。約束された地位。ついでに言えば、中性的な顔立ちで美少年だ。才に溢れたこの少年が、その力で何を為そうとするのか。邪な考えは無いか。聞きたくなってしまった。

「殿下はメイジとして素晴らしい才能をお持ちです。」

「本当ですか？有難うございます。」

「：ひとつ伺っても宜しいでしょうか？」

「はい。为什么呢？」

「殿下は、その、どういったメイジにならたいのでしょうか？」

ウルスラが問いかける。この、あまりにも才能に恵まれた王太子が何を成すのか。ウルスラの興味はそこにあった。

「強くなりたい。この国、いや、このハルケギニアの誰よりも。」

「強く：ですか？失礼ながら、殿下はこの国の王太子です。殿下ご自身がメイジとして強くなる必要は無いのではないのでしょうか？ハルケギニアでも屈指の魔法騎士隊も居ますし、王下の貴族達も居ます。彼らの力を宛てにされるべきでは？」

「本来であれば、その通りだと思う。だけど、このハルケギニアでは魔法だけがその人間の評価になるから。それに、このネーデルラントは一枚岩じゃない。東部・ズヴォーレのファン・ハール・オーフェルアイセル伯、北部のファン・ボメル・フローニンヘン侯など

は、現王家の人氣に大人しくしているだけだ。隙を見せたら、喉元に噛み付いてくるかもしれない。そして、帝政ゲルマニアの存在。また、トリステインとは友好を築けているが、それも現王のヘンリー？世陛下が冠を被っているからに過ぎない。」

わずか3歳の子供が、之ほど流暢に自分の考えを語り、国の行く末を案じていることに驚きを隠せないウルスラだったが、ラファエルはそのまま続ける。

「ウルスラには正直に言うておくよ。今は父様が健在だからうまく機能しているけど、この国はまだまだ改良すべき余地がある。僕はそれを是正したい。だけど、改革には血が流れる。これは避けられないんだ。だから、僕は自分の力を国中に示さなければいけない。貴族からの反発を抑え込み、従わせる事が出来る力が欲しい。この国を支える力が。他国の脅威からこの国を、そして弱き人々を守る力が。：僕がこの1年の間、王城の書庫で読み続けていた本の中に、東方の言葉が書いてあった。”正義なき力が無力なものと同じ様に、力なき正義もまた無力”だって。僕はこの言葉を、自分の人生の戒めとした。」

ラファエルの言葉に、稲妻に撃たれたような衝撃を受け、ウルスラは確信していた。これは天啓だと。この王太子を守り、忠誠を誓う。これが自分の生まれた理由だったのではないか？

齡3歳にして、このカリスマ性である。この王太子は、ハルケギニアの歴史に名を残す英雄となるのでは。

ウルスラはごく自然に、片膝を地面に落とし、背筋を一段と伸ばし、頭を垂れ、両手で持った杖剣をラファエルに捧げた。歓喜に打ち震え、左右の、藍色の大きな瞳には涙が溜まっていた。

「我が名はウルスラ・ヒルデガルト・マグダレーナ・フォン・ラン

ゴバルド。二つ名は”金盾”。この”金盾”のウルスラ、今この時を以て、ラファエル王太子殿下に永遠の忠誠を誓います。この杖は貴方の為に。生ある限り、貴方の盾となり、殿下をお守り致します。どうか、御傍に。」

「ありがとうございます、ウルスラ。こちらこそ、宜しく。どうか、僕に力を貸してください。」

「光栄の極みです、殿下。幾久しく、宜しくお願い致します。」

後に、”覇王の盾”と呼ばれる、忠実な右腕の誕生であった。

母と鬼道と魔法の研究（前書き）

設定のみクロス入ります。

母と鬼道と魔法の研究

ウインの月、エオローの週、マンの曜日。

ハルケギニアは一部の地域を除き、雪がチラつき始めていた。

ここネーデルラントは、そんな一部の例外である。周辺を流れる暖かい海流に加え、首都ユトレヒトに近い、デンブルグ島に住まうと言われている火の精霊の恩恵により、ウインの月も半ばを過ぎてなお、暖かく過ごし易い気候であった。

「ねえ、わたしの小さなラフィ？ たまには母と一緒に昼食でもどう？」

この女性はシルビア・クリステル・マリアーナ・フォン・アルデルヴァイレルト。その名が表す通り、ヨハン一世の妻にしてラファエルの実母である。ちなみに年齢は24歳。まだまだ女盛りだ。

「申し訳ありません、母様。書庫にウルスラを待たせておりますので。昼食は後で頂きます。」

「そう…また、あの女となのね…」

「か、母様？」

不穏な黒いオーラがシルビアを包む。

「私の可愛いラファエルをあんな、胸の薄い野良猫なんか…渡すのですか！」

「胸は関係ないでしょう、胸は。母様、僕は…むぐぐ！」

「でかしたわ、アリサ！そのままテラスまで拉致・・・もとい、連れて行って頂戴！」

「かしこまりました、王妃殿下。ラファエル殿下、申し訳ございません。」

後ろからそっと近づき、ラファエルの口を両手で塞ぎつつその頭を豊満な胸で挟んでいるのはメイド兼女官のアリサ・フォルネル。れっきとした貴族出身であるが、シルビアに付き従い、シルビアの命令を最優先とする専属メイドだ。

「ぷはっ！アリサ、離してくれ！僕は書庫に行かなければ！ウルスラをむむむ・・・！！！」

今度は両腕で、暴れているラファエルの頭をつかみ、双丘におもいつき顔を押しつける。ラファエルは呼吸困難に陥っていた。

「むう：ちよつとアリサ。あなた、また胸大きくなったんじゃない？ラファエルも嬉しそうにしてるわ。」

「確かに、大きくなったようです。ですが、まだまだ奥様には敵いません。」

「うふふ。そうね、まだアリサには負けられないわ。」

「・・・。」

魅惑の双丘に顔面を全力で押し付けられ、ラファエルの意識は途絶えていた。

――――

「はい、あーん。」

昼食後。至福の表情を浮かべながら、膝の上に乗せた愛する息子の口にケーキを放り込むシルビア。

意識を失わされたまま宮殿のテラスに拉致され、無然としながらもしゃもじやとケーキを咀嚼するラファエル。

普段のポーカーフェイスを崩さずに、二人を見守るアリサ。

穏やかな午後のひとときである。類まれな美貌を誇る3人が座っているテーブルから少し離れた場所には、噴水―魔法の力で動いている―があり、

数羽の小鳥が水浴びを楽しんでいる。小鳥たちにとってこの噴水は格好のリゾート地のようだ。

「もう、何かしらこの可愛い生き物は。はい、これで最後よ。あーん。」

「あーん」

「王妃殿下、殿下。紅茶のお替りは如何でしょうか？」

「頂くわ、アリサ。」

「もっしもっし…僕はもうこれでいい。…早く書庫に行かないと。」

「あらあら、まだそんな事を言っているの？きつと、もうあの女もとつくに居なくなつたわよ。」

「そんな事はありません。ウルスラは僕を待っているに決まっています。ホラ母様、離してください。：ちよつとそこは！いや本当に離せよ！」

「あらあら。思いがけず息子の息子を触ってしまったわ。うふふ。まだ子供ね」

「いや、3歳だから当たり前です！？ちよつと！うわ、ちょコラっ握りしめるな！なんだこの母親：あ、アリサ！なんとかしてくれ！！」

「王妃殿下。」

「なあに？」

「恐れながら、殿下はまだ3歳でございます。少なくとも、あと4～5年は早いかと。」

「いや、それでもはええよ！つーか離せ！」

「キャッ！：あーあ、逃げられちゃった。」

シルビアの膝から脱出し、素早く逃走を図るラファエル。その後姿は、あつという間に見えなくなった。

「あんなに急いで：もう。あの女と書庫で何をしているのかしら？もしかして、まさか、いやでも：」

「王妃殿下の想像されていることが何かは分かりませんが、殿下はウルスラ様と魔法の研究を行われているようです。」

いやんいやんと悶えている王妃に、冷静に報告を続けるアリサ。

「魔法の研究？」

「はい。殿下は既に系統魔法も一通り覚えられたそうです。なんでも、一度見た魔法は自分のものにされてしまおうとか。」

「…それが本当なら、とんでもない天才メイジね。」

息子の息子を握りしめてしまいう変態母ではあるが、腐ってもスクウェアメイジなのである。目を細め、訝しむシルビアにアリサが続ける。

「系統は風と水であらせられるそうです。…既にラインスペルを使いこなされる、とウルスラ様が興奮気味に仰っていました。」

「…。」

金髪のメイドが淹れ直した紅茶を、音も無くひとくち啜りながらシルビアが言った。

「魔法の才能もさることながら、下の方もすごい才能ね。…3歳としては規格外だわ。さすがにあの人の息子。」

「王妃殿下、下品です。」

ポーカークフェイスを崩さずに、アリサがつっこみを入れた。

— — — — —
— — — — —

「ハア、ハア、ハア：ウルスラ、遅くなつてすまない。母様に拉致されていた。」

「それは・・・災難で御座いましたね。シルビア様は殿下を大変に愛されてらっしゃいますから。」

「歪んだ愛の気がするけどね。・・・おお！それだよ、ウルスラ！その本だった！」

「はい、殿下。東方の魔法技術指南書のようにですね。まあ、読めませんが。」

「貸してみてくれ。」

ウルスラから書を受け取り、おもむろに中身を確認するラファエル。

「えーと・・・なになに。『鬼道とは、相手を直接攻撃する”破道”（はどう）と、防御・束縛・伝達等を行う”縛道”（ばくどう）があり、それぞれに一番から九十番台まで様々な効果を持つ術が・・・』」

「で、殿下！！その文字、読めるのですか！？」

「ん？ああ、読めるよ。東方の文字は勉強したしね。」

「そ、そうでございますか・・・。」

忘れていた。この子供、ちょっとおかしいんだ、と自分を納得させるウルスラ。

「一番から九十番台ってすごいよな。しかも二種類の鬼道があるのだから、最低でも188の鬼道があるということになる：あったこれだ！」

「ありましたか！本当だったのですね！」

「ああ。かなり以前に読んだ書だったんだが、頭に残っていたんだ。素晴らしい技術だと思ったからね。」

「読んで頂けますか？」

「うん。えー、『鬼道には言霊の詠唱に関する技術があり、その内の1つに”詠唱破棄”と言う技術が存在する。これは言霊の詠唱を省略して鬼道を放つ技術で、鬼道に抛る即時攻撃を可能とするが、威力を保持することが難しく鍛錬が必要。』」

「言霊とは何でしょう？」

「ふむ。こちらで言う、詠唱ルーンのことらしい。」

「なるほど！つまり、その技術を利用すれば、ルーンの詠唱破棄が可能になるということですか！素晴らしいです！」

「まあ待ってくれ。これだけじゃないんだ。・・・えーと、ここだ。『二種類の鬼道の詠唱を並行して行うことで、鬼道の連発を可能とする”二重詠唱”』と言う技術もあるが、高等技術であり容易ではな

い。詠唱破棄で放った後で詠唱を追加して強化する”後述詠唱”と言う技術もある。』」

「な、なんと……。恐ろしい技術ですね。」

「うん。東方には凄い考えがあるのだな。是非とも一度行ってみたものだ。」

「つまり、殿下はその”詠唱破棄”と”二重詠唱”、それから”後述詠唱”の技術を魔法に応用出来るのでは、そうお考えになった訳ですね？」

「うん。この書によると、”詠唱破棄”は威力を保つのが非常に困難な高等技術のようだ。しかし”二重詠唱”に関しては、直ぐにでも応用が出来そうだね。」

「そうですね。”後述詠唱”に関しては、イメージがはっきりしていないければ難しいかもしれません。」

「うん。とりあえず”詠唱破棄”は後にするとして、”二重詠唱”と”後述詠唱”を単純なドットスペルから研究してみよう。」

「かしこまりました！しかし、私と殿下だけでは人手が足りませんね。」

「今は、実現出来るか分からないからね。だが、土台が出来れば父様に頼んで、魔法研究所を作って人をかき集めてもらおう。」

「御意に御座います。」

こうして、後にハルケニアを震撼させる魔法の新しい概念が誕生していった。

王立魔法研究アカデミー設立？

数ヶ月が過ぎた。ハルケギニアからは雪景色が姿を消し、春が訪れていた。

色彩々の草木と花々、虫たちと動物たち、幻獣たちまでもが心躍らせる季節。

ブリミル暦6231年、フェオの月、フレイヤの週、ラーグの曜日。

ネーデルラント王国王都ユトレヒト、ヘット・ロー宮殿の執務室には、国王と宰相のデ・ケルクホフ候。

その目の前にラファエル王太子と、家庭教師から王太子の護衛に着任したウルスラが座っている。

「で？ラファエル。我々に話があるというのは何だ？」

「はい、ネーデルラント王立魔法研究所の設立を提案します。」

「なに？」

国王が、ラファエルを見定めるような目つきで見る。それは宰相も同様だった。

対してラファエルとウルスラは視線を真っ直ぐに固定し、堂々たる態度であった。

「この数ヶ月、私とウルスラで魔法の高等技術を研究して参りました。その成果を踏まえ、これ以上の研究を二人だけで続けるのは困難と考えました。また、ゆくゆくは新設した研究所を魔法アカデミーとして、魔法学院の上位に位置づける形で生徒を募る方針です。」

これに驚愕の声を上げたのは宰相だった。

「な、なんと！殿下はまだ3歳ではございませぬか！魔法の研究など…」

「しかし事実です、デ・ケルクホフ候。殿下は未だラインメイジではあられませんが、その応用力は我が国のどんな高名なメイジよりも上でございましょう。この私も、殿下に教えていただいた技術・思考方法のおかげでさらに魔法の威力を上げることが出来ました。」

驚愕の声を上げた宰相にウルスラが間髪を入れず反論する。

「ほう、ウルスラにそこまで言わせるか…。」

『まあ、父様はウルスラが脳筋だって知らないだろうからな…。』

口には出さず、頭の中で失礼な事を考えているラファエル。

「なるほど、納得致しました。…では、具体的にはどのような研究をされておられたのですかな？」

「はい。具体的には効率的な精神力消費と威力向上。精神力回復の促進。」

「ふむ…なかなか実践的な研究であるな。いずれも秘薬の利用はしないのか？」

「勿論です。全て理論とイメージで応用します。それから…二重詠唱と後述詠唱。段階的にはありますが、この二つも応用技術

としてある程度の完成を見込んでいます。」

「二重詠唱と後述詠唱?？」

顔を見合わせる国王と宰相。そして、ラファエルとウルスラもしてやったり、の笑顔で顔を見合わせていた。

慌ててグラスに入った水で喉を潤し、国王が言った。

「ラファエル!そ、それは何なのだ?説明してくれ。」

「はい、まず二重詠唱ですが、そのままの意味です。ふたつの魔法をわずかな時間差はありますが、ほぼ同時に行使します。」

「なんだと!?!そんなことが可能なのか!?!」

「なんと!?!そのようなことが可能なのですか!?!」

ほぼ同じ様な反応を見せる二人。さすがに1日の殆どを共に過ごしている二人である。

「可能です。分割思考という特殊な技術が必要になりますが。要は、ふたつの魔法のイメージを包括的に捉え、尚且つ頭の中でそのイメージをそのまま維持する技術です。」

「むうう……。なるほど。」

「しかし、聞くだけでは難しくて想像がつかんな。試しに見せてくれないか?」

「勿論です。……フル・ソル・イル・ウインデ・ウォーター。浮レビテ
イシヨシ

遊・・・凝結」
コンデンセイション

すると、先ほど国王が飲み干した空っぽのグラスが浮き上がり、さらに空中に集まった水がグラスを満たした。その間、グラスは宙に浮かんだままである。そして、ゆっくりと音も無くテーブルに置かれた。

僅か10秒ほどの間の出来事であったが、国王と宰相の視線はグラスに張り付いたままであった。今もなお、二人はテーブルの上にある、グラスの中で静かに揺れる水面を見つめ続けている。

「お二人とも、如何でしたか？」

茫然自失といった二人であったが、ハッ、と意識が現実に戻ってきたようだ。

「如何でしたか？ じゃない！ ラファエル、これは魔法の常識を揺るがす大発見だぞ！！」

「確かに。いま行われたのは、グラスを”レビテーション”で浮かせて、”コンデンセイション”で凝縮させた水をグラスに満たした。それだけの事です。しかし、殿下はこの執務室という場所だからこそ、この二つの魔法を選択したのですな？」

「その通りです。例えば、戦場であれば”アースハンド”で敵の足を止めている間に”ウィンディ・アイシクル”で貫いたり、周囲を包囲された時は”ウィンドシールド”と”ファイアーボール”の攻防一体の魔法により、状況を打破したりする事を見込めます。さらに、”フライ”を行使しながらによる空中戦すらも可能にします。」

「おお！ 一人のメイジが二人のメイジに！ そして、二人のメイジが

四人のメイジになるという訳だな！」

「確かに素晴らしい技術です。しかし、そのぶん精神力の消費は激しいのでは？」

「その通りです、宰相。そこで、先に説明した精神力消費量の効率化、それから精神力回復の促進が役に立つ訳です。」

「おおおお……。」

「なんと！そういうことですか！なるほど、全く文句はありません。穴の無い研究成果ですな。」

「ラファエル。もう一度、今度は外で戦闘時の使い方を見せてくれないか？」

「わかりました。では屋外訓練場へ行きましょう。」

この後、魔法騎士隊員相手にラファエルが見せたのは”アースハンド”による束縛からの、威力を抑えた”ウォーターウィップ”での攻撃であった。

当然、二つの魔法を同時行使したラファエルに面食らった隊員は、ラファエルの”ウォーターウィップ”を避けることが出来なかった。

そして、先程説明し損ねていた後述詠唱についても一通り説明した後、披露した。これについては、ラファエルは未だラインクラスである為（3歳なのだからそれでも十分に凄いのだが）、広範囲攻撃用魔法を行使する事が出来ず、ウルスラが担当した。

金髪のスクウェアメイジが見せたのは、”クラック”という小さな地割れを起こす魔法を、後述詠唱によって強化したもの。その破壊

的な威力にこれを見た国王は大層機嫌を良くし、魔法研究所の設立と大々的な研究員の募集を瞬く間に実行したのであった。

ただし、ウルスラは自身の魔法によって崩壊した屋外訓練場を、半泣きで修復するのに丸2日かかった事を記しておく。

王立魔法研究アカデミー設立？

「あなたの研究内容を教えて下さい」

「はいっ！まず、始祖ブリミルがどのような服を召しておられたかですが…！」

「有難う御座いました、おかえりください」

「あなたの研究内容を教えて下さい」

「はっ。これをご覧下さい。このガーゴイルですが、なんと夜のお供に！ここを見てくだされ、こんなにリアルに」

「18禁なので今すぐ帰ってください」

「あなたの…」 e t c

「ふう。中々まともなのが来ませんね。」

「全くだ！どうなってるんだ、この国のメイジは。いや、ハルケギニアのメイジってこんなもんなのか…？」

「まあ、研究者というのは大体あんなものですね。」

王命により、ネーデルラント王立魔法研究アカデミーの設立が發布されて以来、毎日のように応募してくる研究員候補の面接を行っているラファエルとウルスラ他、数名の審査役貴族たちであったが、散々な目に会っていた。何しろ、既に面接した人数は100を越え

るが、まともな研究をしているメイジが1人も居ない。研究員から育てなければいけないのか・・・？という空気すら漂い始めた頃であった。

「あー、あなたの研究内容をオシエテクダサイ」

「（殿下！投げやりになってますよ！）」

「（あーもういいよ、今日は。早く帰ろう）」

「（殿下！そんなことでは…）」 「あ、あのう…？」 「はいっ！？」

「あ…え、えっと、私の研究は”風魔法以外の偏在”についてです・
・。・」

「!？」

「あうう！ごめんなさい！こんな下らない研究で！わたし、やっぱり帰ります！」

「待った待った！落ち着いて、座ってください！」

どうやら、えらく気の弱い候補のようだ。しかし、初めてまともな研究内容である。これを逃す手はない。

「えうう・・・？」

「詳しくお話を伺いたい。続きをお願いします。」

「わ、わかりました…。まず、へ、偏在という魔法は、他の魔法と

比べてお、大きな違いがあります…。」

「と、言いますと?」

「はい、ま、魔法のイメージ方法に独自性があります…。私は、ぶ、分割的思考と呼んでいます。が、他の魔法には必要のないか、考え方になると思います…。」

「……!」

二人は驚愕した。ラファエルとウルスラが頭を捻り合って改良した分割思考に、よもや一人で辿り着いたメイジが居たのだ。

「そ、それで、そのイメージがあれば、か、風メイジでなくても、偏在が…」

「サビーネさんでしたね?」

「は、はいっ!」

「今の理論はとても興味深い。出来れば実際に見せて欲しいのですが、もうそこまで形にはなっていますか?」

「は…?」

「見せてもらえますか?」

「わわわ、わかりました!…ユビキタス・ウル・カーノ」

「おおおお…」

赤髪の女性が聞きなれないルーンを唱えると、そこには二人の女性が立っていた。片方の女性の周囲が高熱によって陽炎が起きているので、こちらが偏在だと分かってしまうものの、確かに火魔法での偏在を実現している。正に、世紀の発見と言えるレベルのオリジナルスperlであった。しかも、独自に分割思考まで辿り着いているのだ。二人の叫びは当然と言えた。

「採用っ！！」

「き、きゃあ！」

「あ、ごめんなさい。驚かせてしまって。サビーネ・アデライーデ・ファン・ブロンクホルストさん。貴方をA級研究員に採用します！これから宜しく！」

「あ…ありがとうございますっ！…ううう、わたし、わたしホントに？」

どうやら性格的には少々問題があるものの、研究員としては非常に優秀そうだ。目出度く採用第一号となったサビーネには、労働条件と機密保持誓約書へのサインをさせ、勤務開始日を伝えて帰した。

次の候補者は、先程の女性と同年代と思しき男性であった。金色の短髪に

少しの雀斑、痩せ型だが身長は高く180センチはありそうだ。キョロリと目を

こちらに向けると、ハキハキとした声で言った。

「俺は、平民です！しかし、母が貴族でしたので魔法が使えます！」

青年は続ける。

「ネーデルラント出身ではありません！俺は、トリステインで生まれ育ちました！

トリステインでは、平民は貴族の奴隷でしかないです！俺は、平民であることに絶望していました！

そんな時、今回の募集を知りました！俺は、家を出て、ここに来ました！家族には何も言っていない！傭兵団にでも入ったと思っているでしょう！」

「トリステインの平民達は、平民メイジを決して仲間と認めません！俺は、この歳になっても友達の一人もいたことがありません！だから、魔法の勉強はがんばりました！今日は、その成果を見てもらいたいです！」

ラファエルは青年の叫びに、青年の心の嘆きを感じた。

それはウルスラも同様で、普段の彼女であれば途中で青年を諫めるだろうが、それをしなかった。否、出来なかった。たったひとつ、何かがまかり間違ってネーデルラントに来ることが無ければ、自分も青年と同じだったかもしれない。そう感じていたからである。

「：分かりました。あなたの、勉強の成果を見せてください。」

「はい。じゃあ、あの俺に何か魔法を撃って下さい。ファイアボールでも、エアハンマーでも。」

ウルスラの問いに、青年は答えた。それを聞き、ウルスラは青年の真意を確かめようとしたが、ラファエルがウルスラを見つめ、そっと頷いた。それを見たウルスラも、コクリと頷いた。

「分かりました…それでは、ファイアボール！」

直径20 سانت程の、やや小ぶりの火球が青年に向かって放たれた。火球は燦るような音を上げながら、青年に直撃…するかと思いきや、青年の「アブソープ！」というスベルと共に、青年の身体に吸い込まれるように消えてしまった。

「!？」

「い、今のは何ですか!？」

「俺のオリジナルスベルです!アブソープと名づけました!魔法を吸収して、やり過ぎし、尚且つ自分の精神力の足しに出来ます!」

・・・

場を沈黙が支配し、その後に、ラファエルとウルスラ、そして幾人かの試験官が叫び声を上げた。

「これはとんでもない、とんでもない魔法ですぞ!」

「なんという…恐ろしい!そして、素晴らしい!」

「御仁、御名前を教えて下さい!」

ネーデルラント貴族たちの反応に、動揺を隠せない青年。まだ名前も言ってなかった事に気づき、慌てて言った。

「失礼しました、ジョバンニです」

「では、ジョバンニ殿。合格です!」

「あ、ありがとうございます!!!」

その後、勤務開始日や労働条件などの説明を行い、その度にジョバンニは目を丸くしていた。なにしろ、週休1日に隔週で2日となる上、給金は月に40エキュ。これはトリステインの下級貴族の給金に匹敵する額だ。

その上、成果を上げればさらに給金は上がるというのだ。本当にネーデルラントに来て良かった、家族に仕送りも送れる。ジョバンニはそう思った。

「ところで、トリステインに今もいるご家族は呼び寄せますか？」

「・・・え？」

「良ければ、無料で住居も提供致しますよ？ご家族で住まれては如何ですか？」

「い、いいんですか！？でも、ウチは8人家族で・・・」

「貴方が一家の大黒柱になれば、問題は無いと思いませんか。トリステインに迎えに行きましょう。」

「は、はいっ！！ありがとうございます…。」

ジョバンニは堪えきれず、泣き出してしまった。そして、試験官に付き添われながら部屋を後にした。

ラファエルは、トリステインを実際に見てみたくなった。ジョバンニが泣いてしまったのは、トリステインでの思い出が辛かったからだろう。そこから家族をネーデルラントに連れてこれるという事実が、とても嬉しくて泣いてしまったということは気がついていた。よほどの惨状なのだろう。王族として、民の上に立つ者として、他国と言えども現実から目を背けたくなかった。

また父様を困らせてしまうが、これは見ておかなければならない。
ラファエルはそう思った。

それから数日間で合計8人が合格となった。男性研究員が5人、女性
性は3人。系統はそれぞれ2人ずつバランスも悪くなく、なかなか
の結果である。

しかし、ラファエルには一人だけ気になった人物が居た。ガリア出
身貴族の、ヴァンサンと名乗った男だ。得意な魔法は火の魔法と、
なんと失われしネクロマンシーだという。

ネクロマンシーとは、死霊魔法のことで、高位のネクロマンサーに
なると屍を意のままに操ることも可能だと言われている。

とはいえ、今では既に失われてしまったと囁かれて久しい魔法。ヴ
アンサンが出来るのは、ネクロマンシーの中でも初歩の初歩だけ。
リフレイ

再生という、人が生前身につけていた物などから、死者の記憶を再
生する魔法だ。

それはともかくとして、ラファエルが気になったのは珍しい魔法の
方ではない。ヴァンサンという男の瞳だった。あの瞳は、野望に燃
える瞳だった。ネーデルラントにおいて、野望や向上心を持ってい
ること自体は悪いこととは受け取られず、合格を決めたがどうも気
になる目つきをしていたのだった。

トリスティン視察旅行へ

「ふう、もう飽きた。」

「・・・ラファエル」

「ちょっと、アリサ。シェフを呼びなさい」

「ああ、母様！違うのです。シェフの問題ではないのです。」

突然だが、夕食の時間である。今日のメニューは、マッシュポテト（茹でたポテトを潰し、塩をかけたもの）、エルテンスープ（野菜、とりわけエンドウマメを多めにクタクタになるまで煮込んだスープ）、メインディッシュにローストした鶏肉と付け合せの野菜。シンプルではあるものの、決して悪い料理ではない。しかし、これが一週間ほぼ毎日だとどうだろうか。昨日と一昨日、夕食のメニューで違うのは付け合せについている野菜の種類だけである。

そう、ここネーデルラントの料理は、非常に種類が乏しいのだ。決してアルビオン料理のようにまずい訳ではないのだが、どうもネーデルラントにおいて”食”というのは、優先順位が低く、あまり重要視されていないのである。

「すみません、まずい訳ではないのです。ただ、飽きてしまいました。」

「ううむ。私は子供の頃からこれなのだが・・・」

「わたしもですわ。でも、ラファエルは他人とはちょっと違う感性を持っていますから。」

共にネーデルラントで生まれ育って、他国での留学経験もない国王夫妻には、分からない感覚である。

「しかし、私はまだ行ったこともありませんが、外遊などで他国の料理を食べることもあるでしょう？不思議に思わないのですか？だいたい、ここにマッシュポテトがあるのに何故付け合せにもポテトがあるのですか！」

「わかったわかった。落ち着きなさい。では、ラファエル。おまえが、我がネーデルラント料理の改善を行いなさい。それでいいだろう？」

「え・・・よろしいのですか？」

「父様の言う通りよ。わたしの可愛いラファエル、あなたが考えるべきよ。」

これは願っても無いことであつた。トリステインには、どちらにしろ視察に行きたかつたのだ。しかし、アカデミーに採用した平民の家族を迎えに行くのに一緒に付いて行くとは流石に言えず、理由を考えなければいけないと思つていたところだつた。

トリステインの食文化を視察するという名目で、トリステインという国の民がどんな暮らしをしているかを確認出来る。正に一石二鳥である。

「分かりました。では、今月のテイワズの週に、トリステインに視察に行きます。」

「え？う、うむ、分かつた。護衛はこちらで選ぶからな。」

「はい。しかし、大所帯になってしまうと視察もしにくいでしょうから、少なめをお願い致します。ウルスラが居れば、少人数でも問題無いでしょう。」

「うむ、その通りだな。」

「・・・またあのペチャパイ女と一緒になのね」

「母様！そんな言い方は辞めてください！」

「う、うむ。ラファエルの言う通りだ。シルビア、あまり「あなた？」・・・ハイ、なんでもありません」

だめだこの父親。と、ラファエルは思った。

ニューイの月、テイワズの週、虚無の曜日。

トリステインへ向けて出発の日がやって来た。住居が決まったものの、未だ宿に滞在しているジョバンニと宮廷主任護衛官となったウルスラ、魔法騎士隊”ニーズヘッグ”から若手精鋭の4人を選抜し、いずれも商会の人間の見えるような装いをさせた。

また、他国の領内を通過する以上、完全に知らん顔をする訳にもいかないため、予定ルートにかかる領主とトリステイン王家には、事前の連絡（鷹便）をネーデルラント王家から入れている。

「しかし、私達ともまだ外遊に行っていないですのに。」

「仕方あるまいよ。私とて、ラファエルの外交デビューは、来年の

アンスールの月に開催される、ラグドリアン園遊会の時にしたかったのだがな」

「申し訳ありません、父様、母様。けれど、騎士隊の皆も居ますし、ウルスラもおります。ご安心ください。」

「うむ。ウルスラが居れば、そこらのメイジ100人にも勝る。その心配はしておらん。」

「でも、気をつけてね、わたしのラファエル。ウルスラ、ラファをくれぐれも頼むわね。」

「ハッ。この身が朽ちようとも。ランゴバルドの名にかけて、必ず殿下をお守り致します。」

「うむ、頼んだぞ。」

「では、行ってまいります。」

「こうして、ラファエル達はトリステインへ向け、旅立ったのだった。」

「殿下、何をブツブツ呟かれておられるのですか？」

「いや、こっちの話だ。それより、まずはラ・ヴァリエール領だね。」

「は、はい……。」

「?どうしたんだ、ウルスラ。」

「いえ。何でもございません。トリステインに入る前に、デン・ハーグで一泊致します。」

「そうなの？」

「はい。その後、明日の早朝にトリステインに入国致します。ラ・ヴァリエール領は、トリステイン国内で最も治安が良く、王都に次いで栄えている地になりますので。入国後は、なるべくラ・ヴァリエール領内で宿を探すのが宜しいかと思われます。」

「うん、なるほど。ラ・ヴァリエール公爵はトリステインでも最高の盟主と話は聞いている。その上、王家の血筋でトリステイン国内でも支持率が高いらしいね。ヴァリエール王朝を望んでいる貴族の派閥もあるとか。」

「その通りでございます。良くご存知で。」

「・・・ヴァリエール家に何か因縁でもあるのかい？」

「殿下。そういう訳ではありませんが・・・」

何となく歯切れの悪いウルスラであったが、ラファエルはそれ以上の詮索はしなかった。それは、ウルスラに信用を置いている証でもあったし、何よりウルスラの美しい顔を曇らせる事が忍びなかったからだ。

その夜、一行はデン・ハーグの高級宿に泊まったが、宿の夕食にやはり辟易したラファエルだった。

――――

「ゆうべはおたのしみでしたね。」

「は？ 殿下、昨夜は疲れて早めにお休みになられたご様子でしたが、起きておられたのですか？」

「いやいや、一度言ってみたただけさ。特に深い意味は無いんだ。ところで、あそこに見えるのがトリステインとの国境だね？」

翌日。前日に続き、早朝に出発したラファエル一行。デン・ハーグからトリステインとの国境までは、馬車でおよそ1刻ほど。まだ正午にもなっていないかった。

「はい。国境を越えれば、そこはもうラ・ヴァリエール領です。」

「うゝ。ついに、トリステイン料理が！ 楽しみだ、時間も丁度よさそうだし早速、ランチに良さそうなレストランを探そう！」

「かしこまりました！」

トリステイン国境沿いには国境警備隊事務所があり、出国届を提出する。王家の捺印入りの届書を見た警備は大慌てだった。ラファエルがトリステイン入国の際に後ろを振り返ると、こちらが見えなくなるまで直立不動のまま敬礼していたのだった。

ラ・ヴァリエール領に入り、しばらく走るとすぐに都市部に入った。トリステインに入ってすぐにラファエルが気がついたのだが、馬車が揺れる揺れる。外を覗くと、どうやら馬車道が石で舗装されてい

ないらしい。

この事をウルスラに尋ねると、馬車道の舗装を行ったのは、ネーデルラントがハルケギニアで最初とのことだった。それも、父のヨハン一世が莫大な金を注ぎ込んだ事業だったそうだ。

しかし、資金はかかったが道が舗装された事で商人たちの往来が盛んになり、商人が行き来しやすくなったことで様々な物価が下落し、それを受け消費も活発になり、結果的には10年も経たない内に損益分岐点を越えたほどの経済効果を産んだ。

それが、脳筋なウルスラの拙い説明から分析したラファエルが導き出した答えだった。

烈風と金盾（前書き）

ついに原作キャラの登場と相成りました。

烈風と金盾

「ウルスラ、この”鴨のシトロソソース”というやつを食べてみて、
凄いぞ！」

「殿下、じゃなかったトビアス様。こちらの”牛肉の赤ワイン煮込み”も素晴らしいです。牛肉がこんなに柔らかくて美味しいなんて。」

ラファエルは、周囲が騒ぎにならないよう、殿下呼ばわりをせず、ミドルネームで呼ぶようにと言い含めていた。商会の跡取りという設定である。

「うんうん。どうしたジョバンニ、早く食べないと無くなっちゃうぞ。」

「し、しかし…。いいんですか？視察とはいえ、殿、じゃなくてトビアス様と同じテーブルだなんて…」

「気にするな、皆食べてるじゃないか？だいたい、視察関係無しに僕は元々気にしない。さあ、早く食べなよ？」

「わ、わかりました。」

「しかし、流石トリスティン料理ですね。この、”ロマリア茸”とレバーのパテも凄い。”テリーヌ”というのですね」

「これも美味しいよ。”アスペルジュのスープ”か。この野菜は是非、我が国にも輸入したいな」

「デザートみたいに見えますが、この”ポモドーロとサン||ジャック貝のフラン”という料理は素晴らしいですな。手の凝りようが凄まじい」

テーブルに所狭しと置かれた高級料理が、総勢7人の胃袋に次々と収まっていく。平民のジョバンニは、自国の料理とはいえ、今までに縁の無かった貴族専門店の料理に感動すら覚えていたが、ラファエル達ネーデルラント人の衝撃はそれ以上だった。今まで自分たちが喜んで食べていた料理は、一体何だったのか？

やがて、ラファエルを含めた誰もが、無言で料理を口に運んでいた。トリステインの貴族ならば、食事中に無言なのは当然というものだが、ネーデルラントにおいてそのような習慣はない。食事中はお喋りも楽しむものだ。

しかし、彼らは今、無言である。トリステイン貴族の気持ちが分かった気がした。これだけ料理が美味ければ、無言にもなるというもののだ。次にラファエルが口を開くのは、テーブルの料理が全て片付けられた時だった。

「皆、どうだった？」

「とても素晴らしい時間でした。」

「今まで喜んで食べていました料理が、とても貧相なものに感じましたね。」

「色々と見たことのない工夫がされていました。今回の視察にコックも連れてくるべきでしたね。」

様々な意見が交わされる中、運ばれてきた彩色豊かなデザート達も平らげられ、至福の時間は終わった。これは、きちんと改革を行うのであれば料理人を何人かスカウトしなければいけないという結論にも至った。それ程、ネーデルラントとトリステインの両国には、料理に対する考え方の格差があるのだ。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

食後の紅茶も楽しんだ後、一行は店主を呼び、満足の言葉とチップを渡し、店を出て行く。最後尾のラファエルとウルスラが店の従業員に礼を言ってお出て行くと、優美な貴族の親子とすれ違った。なるほど、ここは貴族達に人気の店だそう。すれ違い様にも分かるような気品高い貴族だ。さぞかし名家の女子達に違いない。ラファエルがそう思っていると。

「待ちなさい。」

すれ違った女性貴族の方から声がした。何か落とし物でもしたかな？ そう思ったラファエルが後ろを振り返ると、

ガキーン！

ウルスラとピンクブロンドの髪色の女性貴族が、ブレイドを纏った杖で鏢迫り合いの状況に至っている。前を歩いていた騎士隊達が二人を囲み、一斉に女性貴族に向かって杖を向ける。これは？ 一体、何が起きている！？ ラファエルの困惑をさらに助長するような声が聞こえる。

「お母様！？と、突然何をなさるのです！」

「離れていなさい、エレオノール！」

「ウルスラ！どうしたんだ！」

女性貴族の娘であろう、金髪の女子の叫びにラファエルも続いて、主任護衛官に向けて叫び声を上げた。すると、女性貴族が静かに語りだした。

「・・・ウルスラ・ランゴバルド。やはり、あなたでしたか。今頃になって、私や夫の命でも狙いに來たのですか？金盾」

「・・・誤解です、烈風殿。私は既にゲルマニアを離脱しています。」

「っ！ 金盾ですって！？ あの有名な！」

「っ！ 烈風だって！？ あの伝説の！」

『ウルスラが高名なのは既に知っていたが、あの”烈風”と繋がりがあったとは。と、いうことはこの女性が、元トリスティン王国魔法衛士隊・マンティコア隊隊長、通称・烈風のカリン。待てよ。カリン？ 確か、ラ・ヴァリエール公爵夫人の名前はカリーヌ・デジレ…そういう事か。』

「烈風殿！ いえ、カリーヌ・デジレ・ド・ラ・ヴァリエール殿！ 杖を収め下さい！・・・ウルスラ！ 君もだ！」

「お母様！お止め下さいまし！」

ラファエルの制止に続き、金髪の子女も母に懇願の叫びを上げる。しかし、二人は圧力を弱めない。二人の魔力は拮抗しており、力を抜けば、押し負ける。二人ともそう考えていた。すると。

ばしゃん

カーリーヌとウルスラ、二人の頭上から水球が落ちてきて、二人の頭をびしょ濡れにした。二人はそのままの体制で固まったが、集中が切れたことで、ブレイドの魔法は霧散したようだ。しかし、金髪の子女エレオノール・ド・ラ・ヴァリエールの表情はさらに蒼白になっていた。あの恐ろしい母に向かって、凝結コンデンセーションの魔法で作り出した水球を・・・あのオレンジ色の髪をした少年がぶつけたのだ。しかも、頭に・・・

「・・・あなたは誰ですか。何故、私の名前を知っているのですか」

ゴゴゴゴゴゴゴ・・・という音が聞こえるような気がする中、下を向きびしょ濡れの頭を拭こうともせず、カーリーヌ・デジレがラファエルに問いかけた。

「烈風殿。こちらの方は「ウルスラ。私から説明しよう。」・・・かしこまりました。」

ウルスラも頭を拭いもせず、頭を垂れる。・・・無論、カーリーヌとは意味が違うが。

「失礼致しました、しかし頭が冷えたでしょう？・・・私は、ラファエル・トビアス・マウリッツ・ファン・アルデルヴァイレルト

と申します。」

「ひっ！・・・それでは！」

「・・・あなたが、ネーデルラントの王太子殿下」

「そうなります。領内通過の伝令は流した筈ですが。」

ラファエルがじつとカーリーヌを見つめ、問いかける。カーリーヌも頭を上げ、ラファエルの双翠の瞳を見つめる。殺意を込めながら。先ほどラファエルに対し怯えたような声を上げたエレオノールであったが、今度は母から届く濃密な殺意に言葉を無くし、目を潤ませている。

しかし、烈風と対等にやり合ったウルスラはいざ知らず、目の前に居る5歳にも満たないであろう子供が、歴戦の勇士である烈風カリンの殺意が込められた視線に、まともに向き合っている。それどころか、敵意さえ感じる。カーリーヌは、こんな攻撃的な瞳をした子供を見た事がなかった。

「烈風殿。」

そこに、射殺するような目つきでウルスラがカーリーヌを睨みつける。

「・・・どうやら、ネーデルラントの王太子殿下は只者では無さそうですね。大変失礼致しました。」

頭を下げるカーリーヌに、ラファエルは笑顔で言った。

「私は貴方に試されたようですね。ところで、我が王家の主任護衛官と貴方は旧知の仲のようですか？」

「……。」

「……。」

「まあ、お二人とも話したくないという事であれば、構いませんが。行こうか、ウルスラ。」

「お待ち下さい。」

「まだ何か？」

すると、カリーンは道端——と言っても貴族専門料理店の軒先であるが一にも関わらず、あたかも臣下の礼のようなポーズをとった。

「大変失礼致しました。ラファエル王太子殿下の御祖母様は、我がトリステイン王国・国王陛下の外戚であられます。つまりは私の主君の身内も同じこと。ご無礼を働き、申し訳ございませんでした。この罰は「やめて下さい。」はっ。」

「別段気にしていませんから。私の方こそ、王族という立場でありながら、天下に聞く烈風殿のお姿を存じ上げなくて申し訳ありません。」

「殿下……。滅相も御座いません。私が現役を退いたのは、もはや20年近くも前のこと。トリステイン国内ですら、ラ・ヴァリエールでの私の存在を知る者は一部しかおりません。殿下がご存じ無いのも当然と言えます。」

「そうですか。それでは、おあいこという事で、手打ちに致しませ

んか。」

「しかし、殿下！それでは、臣下に対して示しがつきませぬ！」

ラファエルの提案に、今まで黙って話を聞いていたウルスラが思わず声を荒げた。

無理も無いことである。事実、カリヌは他国とはいえ、王家の嫡子であるラファエルを殺意の籠った視線で睨み付けたのだから。本来であれば、この場で斬り捨てられることは無くても、逮捕・拘束は免れるものではない。

その証拠に、“オランイエ”の騎士達はその軍杖をカリヌへ向けたまま、未だに下ろしてはいない。

「ウルスラ。いいんだ。」

「いえ、良くはありません。この際ですから言わせて頂きますが、殿下は下々の者に対して気が良すぎます！」

「仕方ないだろう。これが僕の気性なのだから。」

「仕方なくありません！だいたい・・・」

ウルスラの矛先は既にラファエル本人に行っているようだ。これを見て呆気にとられた騎士達が、今度こそ軍杖を下ろす。それを見たカリヌが提案した。

「わかりました。では、こういたしましょう。」

金盾とヴァリエール家のヴァンパイア（前書き）

今回はちょっと長いです。

金盾とヴァリエール家のヴァンパイア

「誠に申し訳御座いませんでしたっ!!」

所変わって、ここはラ・ヴェリエール公爵家。

夕日が窓から差し込む頃、ラファエルに土下座でもしそうな勢いで謝罪をするこの男性は名をピエール・アルベルト・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエールという。かつて、サンドリオン（灰かぶり）卿と呼ばれた、現ラ・ヴァリエール公爵である。

「いえいえ、全く気にしておりません。わざわざお招きいただくような事でも無いのですが……。」

「とんでもない! 妻が大変なご無礼を働きまして、これは夫である私の責任でもあるのです! そうだろう? カリーヌ!」

「……夫の言う通りで御座います。誠に、申し訳御座いませんでした。このカリーヌ・デジレ、如何なる罰でもお受けいたします。」

（参ったな、こんなに大袈裟な事になるとは。かといってこのままだとウルスラがまた五月蠅いし。……!）

思案していたラファエルが、面白い物を見つけた、というような顔でヴァリエール公爵に言う。

「分かりました。では、夕食をご馳走して下さい。それと、お話をお聞きしたいのです。」

「は? は、はあ。しかし」

「いえ！勿論、トリスティンの国家機密に関わるような質問に答えろ、と言っている訳じゃありません。ただ、ちょっとばかり昔の話をね。」

にこ、と音が出るような笑顔と共にウィンクをするラファエル。そこへ、客間にノックが響いた。

「お父様。エレオノールです。カトレアとルイズも連れて参りました。」

「なんだと、ルイズもか？まあいい、入りなさい。」

「はい。失礼致します。」

入ってきたのは先程、街で公爵夫人と一緒にいた金髪のキツそうな目つきの美人・エレオノールと、それとは逆に柔らかい印象を受ける桃色ブロンドの髪色の女性。エレオノールよりはいくらか年下だろうか。

「殿下、先程は大変失礼致しました。改めまして、エレオノール・アルベルティーヌと申します。こちらは妹のカトレアです。」

「初めまして、殿下。カトレア・イヴェットと申します。この赤ちゃん、末妹のルイズ・フランソワーズですわ。まだ1歳ですの。」

「初めましてお二人とも。ラファエル・トビアス・マウリッツ・ファン・アルデルヴァイレルトです。美人のお二人と、可愛い赤ちゃんにお会いできて光栄です。」

美人という言葉にやや驚きを隠せないエレオノールとカトレア。まあ未だ4歳にも満たない子供が世辞を言うなど、二人の年齢が12歳と9歳とはいえ、あまり経験することではないだろう。

「ところで、殿下。先程の話ですが、たったそれだけの事で宜しいのですか？」

「ええ。何しろ、今回トリステインに来たのは、トリステイン料理の視察が目当てですから。」

「視察？…ああ、なるほど。」

納得されてしまった。どうやら、ネーデルラント料理の評判はトリステインでも有名なようだ。悪い意味で。何だか悲しい気持ちになってしまったラファエルであった。

「かしこまりました。それでは、シェフに存分に腕をふるってもらう様、言いつけて参りますので。カリーン。今後は、失礼の無いようにな。」

「はい、あなた。」

颯爽とヴァリエール公爵が部屋を出て行った。しかし、とんでもなく巨大な家である。もはや、城と言ってもいい。王家の宮殿である自宅に勝るとも劣らないヴァリエール家の財政規模は、凄まじいものがある。そう考えていると、

「だぁーだぁー！だっ！」

カトレアが抱えている赤子が、しきりにラファエルを見つめ、キャ

ツキヤウフフとばかりに楽しそうな声を上げている。話しかけられているのか？と、思い、ラファエルも笑顔でなんでしゅかし、と赤子に近づいていく。

それを見ていたエレオノールとカトレアは顔を見合わせた後、ぷつと噴出してしまった。どうやらこの王太子は、本当に怒っていない様子だ。王家の嫡子だとは思えないほど気さくなラファエルに対し、二人ともルイズをあやしなから次々と質問を投げかけていった。

「・・・それにしても、貴方は変わりませんね。とても幸せな家庭を手に入れたようなのに。」

「貴方のほうこそ。相変わらず冷静で。それにしても、いつから火の国へ？」

賑やかな様子の3人を遠巻きに、微笑みながら会話を交わすカリィヌとウルスラ。しかし内容はどうかであろうか。

「・・・10年ほど前、アルブレヒト三世の暗殺に失敗し、瀕死の状態で入国した私をたまたま救ってくれたのが国王陛下でした。」

「たまたま？ そんな偶然があるのですか？」

「ええ。とはいっても、陛下は情報を得ていたかもしれませんね。とんでもなく”耳”の聞こえるお方ですから。」

「”ジーザス”。やはり、素晴らしいお方そうですね。ネーデルラントの馬車道はハルケギニア中に知れ渡っています。このトリステインでは、諺にもなっていますよ。”ネーデルラントの馬車道は3日で成らず”と。」

「ええ。あのとき、陛下に救って頂けなければ、私は既に野垂れ死んでいたでしょう。」

「・・・貴方の、ランゴバルド王家の悲劇については、私も知っています。何故、貴方がゲルマニア皇帝の手足として働いていたかも」

「烈風殿とは四度も戦場で相まみえましたからね。」

「そうですね。遠い昔の様だわ。あ、先程は御免なさい。」

「いえ。私が生きてネーデルラント王家に仕えている事を知っている人間は、トリスティンにもゲルマニアにも居ないでしょうから。」

当然です、とウルスラは微笑んだ。カーリーヌは、自分が彼女の立場であったなら、こうして笑いかける事が出来るだろうか、と思った。家族を謀殺され、自身も騙され、いように操られたうえ、軍人として戦場で死ぬ事も許されず。生きることを放棄せずに、それでも笑えるだろうか、と。

しかし、それ以上にどうしても聞きたい事がカーリーヌにはあった。

「ところで貴方、私と2、3歳しか変わりませんでしたよね？何故そのように若々しいままなのですか？」

「「「ええええええええええっー！ー！！」」」

いつの間にか二人を観察していた3人が、一斉に驚愕の叫びを上げたのだった。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

夕食までの数刻は大変だった。カリィヌを筆頭に、エレオノールとカトレアまでが必死で、ウルスラに対し若さの秘訣を聞き出そうと
していた。と言ってもウルスラには全く身に覚えが無く、困惑しき
っていたようであったが。

ラファエルもウルスラのことは20代後半だと思っていたので、し
きりに驚いていた。この事実が母の知るところとなれば、ますます
面倒なことになりかねない、などと考えていたころ、夕食の支度が
出来たと執事が知らせに來たのだった。

夕食後の席では、ヴァリエール公爵とカリィヌ夫人が軍で働いてた
頃の話聞いた。その頃に、ウルスラとは何度も戦ったということ
も。

ウルスラは当時、ゲルマニア皇帝の飼犬だったと自虐的に語った。
”金盾”は、トリステイン王国軍に大きな被害をもたらし、カリィ
ヌとの決闘は、幾度も戦場を瓦礫の山に変えたとはヴァリエール公
爵の談。

「トリステインにはこのような言葉もあります。『この世には、絶
対に逆らってはいけない女性が3人居る。トリステインの”烈風”、
ガリアの”業火”、ゲルマニアの”金盾”』とね」

「なるほど。カリィヌ夫人とウルスラもその中に入っているのです
ね。誰の言葉ですか？」

「私です。ぎゃあっ！」

ふん、と夫を睨みつける夫人に、飛び上がって悲鳴を上げる公爵。どうやらカリーヌ夫人に足を踏みつけられたようだ。

「おお痛・・・失礼致しました。まあ、それは冗談として、戦場で実しやかに噂されておりました話ですな。」

「そうですか。ガリアの”業火”というのは・・・？」

「おお、彼女も同世代でしてな。只、軍人ではありませんでした。ガリアのある大きな都市に蔓延っていた裏の組織、まあ所謂マフィアという連中ですが。奴らをその”業火”で一人も残さずに焼き払ったという、非常に正義感の強い女性ですな。」

「一人も残らず・・・それは凄まじい。」

「全く。戦場に出たという公式な記録は残っていませんが、メイジとしてのその実力は聞こえに高い、大国ガリアの中でも際立っていたとか。現在は、アルビオンの貧乏貴族に嫁いだようで、全く話を聞かなくなりましたが。このハルケギニアでは、”業火”の二つ名は裏社会の連中に未だに恐れられているようです。」

「”業火”というには、火のスクウェアなんでしょうね。」

「そうですね。私としても一度、戦ってみたいと思っていたのですが。」

「はは・・・。」

思わず乾いた笑いを誘われたが、どうも本気で言ってるらしい。夫人は引退してなお、戦場が好きなようだ。

「烈風殿は相変わらずですね。」

「あら、貴方もそう思いませんか。もったも、3人の中で一番強いのはあなたでしょうから、それほど興味は持ちませんか。」

「え!?! お、お母様より強い人間がこの世に居たのですか!」

「・・・エレオノール、あなた母を何だと思ってるのかしら。」

ちょっと教育のやり直しが必要かしらね、などと物騒な事を呟く夫人、ひいひいと悲鳴をあげているエレオノール嬢を尻目に、ラファエルは発言の真意を聞いた。

「ウルスラはカリヌ夫人より強いのですか?」

「そのような事はありません。烈風殿、言葉が過ぎますよ」

「あら、事実ではないですか。確かに、戦場では数を相手にしなければいけませんから、風メイジである私の方に分があるかもしれないかもしれませんが。1対1ならばあなたの方が上でしょう」

「まさかそんな・・・」

「まあ、事実でしような。”金盾”の二つ名が示す通り、ウルスラ殿の魔法の盾には、メイジの魔法がまるで通用しないのだから。1対1では勝てる道理が無い」

ヴァリエール公爵までが真剣な顔で頷いた。ウルスラの魔法の盾。未だ一度も見ることが無かった。ウルスラをじっと見つめると、目を逸らされた。まだ見せる気は無いということか。

[illegible]

「かしこまりました、奥様。」

「これは珍しい、ヴァンパイアのメイドが淹れてくれたお茶ですか。」

エレオノールは知らなかったようで、「まさか・・・」と呟いている。

カリーヌとカトレアはまずい事を知られてしまった、という蒼白の表情。唯一、顔色を変えず平然としているヴァリエール公爵が、重い口を開く。

「いつから？」

「こちらへ来てすぐに。ご存知ありませんでしたか？ヴァンパイアに影は無く、自分で作っているのですよ。ですから、よほど長生きしている種でなければ、敵意を見せられた時に影が不自然な形になります。私が一瞬、敵意の瞳を見せたときに影が揺らいでいました。」

「・・・なるほど。さすがは金盾殿と言ったところですか。」

夫人からアネットと呼ばれた吸血鬼ヴァンパイアと見られる女性は、目を瞑り覚悟を決めているようだった。何かを受け入れるような、そんな穏やかな表情であった。

次いで、公爵が決意の眼差しでこちらを見据えていた。

「殿下、ウルスラ殿、そして皆様。真に申し訳ない話ではありますが、全てを見なかった事にしては頂けまいか。」

公爵は続ける。

「アネットは確かに吸血鬼です。しかし、付き合いも長く、我々に本当に良く尽くしてくれています。彼女は、我がヴァリエール家にとって家族も同然なのです。」

「お、お父様！」

公爵の言葉に、困惑の表情を浮かべていたエレオノールが咎めるような声を上げる。

「エレオノール、済まない。お前には言っていなかったな。カトレアは何故か気づいていたようだが、お前にはいささか潔癖すぎる所があったのでな。真実を知って、それでもアネットの事を受け入れる事が出来るか分からなかったのだ。」

「で、でも・・・」

エレオノール嬢は困惑しきりであった。

今まで自分に尽くしてくれ、時には母のように厳しく。時には父のように優しく接してくれた、正に家族同然であったメイドの正体が吸血鬼であると突然発覚したのだから、無理も無いことである。
ヴァンパイア
そこへ、覚悟を決めたアネットの言葉が響く。

「旦那様、奥様。長い間、大変お世話になりました。この御恩は一生忘れは致しません。そして、エレオノール様、カトレア様。今まで騙すような事をしてしまい、申し訳ございませんでした。」

「アネット、駄目よ!」

「アネット・・・」

メイドを咎める声を上げるカリーヌ夫人。メイドの覚悟を知り、名前を呼ぶことしか出来ない公爵。言葉をかける事すら出来ない二人の娘たち。そしてメイドは続ける。

「ラファエル殿下、ウルスラ様、そして皆様方。お騒がせ致しまし

た。私は夜の内にこの家を出ます。・・・ですから、真に勝手ではございますが、この事は他言無用に願えませんか？」

「私の命が必要なのであれば、120年生きたこの命、差し出しても構いません。ですから、何卒・・・ヴァリエール家に吸血鬼のメイドが居たなどという事実が世に出ては・・・」

頭を下げる、メイドの瞳から零れ落ちる宝石に、ラファエルはトリステイン、ひいてはハルケギニアの現状を垣間見た。

ヴァンパイア吸血鬼。確かに、人間ではないのかもしれない。長命種であるし、血液を糧とする点から人間とは敵対関係にある存在であろう。だが、それが何なのだ。このメイドとヴァリエール家の人間は、強い信頼関係で結ばれている事は明らかだ。

そもそも、今、目の前に居る不幸を救わずして、王族と言えるのか・・・！

カッとなり、熱くなってしまった頭を冷静にする為、ラファエルは大きく深呼吸をした。その様子を見た一堂は、ラファエルの言葉を待つ。

「・・・何の話ですか？」

その言葉の真意を正すような瞳を向ける一同に対し、ラファエルは続ける。

「ヴァリエール家には、妖艶で、とても美しいメイドが居た。私が見たのはそれだけです。皆もそうだろう！？どうだい、ステファン？」

ステファンと呼ばれた、歳若い魔法騎士隊の隊員がラファエルに言

葉を返す。

「仰る通りでございます。これほど美しいメイドは見たことが無い。ぜひ、嫁に貰い受けたいくらいです。そう思わないか、コンスタンツェ？」

「ええ。私が男だったら、夜這いでもかけて手籠めにしてるかもね。だって、こんなにお美しいんですもの。ね、ツェツイー？」

「そうです。肌なんか真っ白で、シミひとつ無くて。ちょっと嫉妬するぐらいです。どうです、エンゾ？ 貴方、彼女が欲しいって言うてなかったですか？」

「まさに！ これは運命の出会いと言えるだろう！ アネットさん、私はエンゾ・ダニエレ・ファン・ゴードと申します！ 私の家はゴード伯爵領、その次男です！ どうですか、まずは」

「一晩、といつものように言ったら切り捨てますよ、エンゾ・・・」

「ははは・・・ま、まさか、ウルスラ隊長。名高いヴァリエール家の縁者の方に向かって。もちろん文通からですよ・・・。当たり前じゃないですか。ジョバンニ、君からも隊長に何か言ってくれよ」

「は、はあ・・・」

ゴニョゴニョ、と言い訳をしているエンゾ。どうやら精悍な顔をしているが、気が多い青年のようだ。

空気を掴めず、エンゾに握られた両手を離すことも出来ずオロオロしているアネットを始め、ヴァリエールの人間達。公爵でさえも、ラファエル達の真意を掴めないようで、普段と違う間拔けな顔をし

ている為、ラファエルは思わず笑いそうになってしまった。

「これがネーデルラント人です。私達は貴方達を吸血鬼とは呼ばず、ヴァンパイアと読んでいます。あなた達が鬼などではないという事を知っていますから。」

アネットへ向けた言葉の次に、ヴァリエール家の人々に向けてラファエルは続ける。

「ですが、他の多くのハルケギニアの人々ではそうはいかないでしょう。ヴァンパイアは人間の敵と思いこんでいるブリミル教徒は沢山います。エレオノール嬢、あなたの様にね。」

突然話を振られたエレオノールはビクツと肩を震わせる。自分の心を言い当てられた動揺によって。

「知ってました？ブリミル教には、ヴァンパイアが敵だという教えは存在しないんですよ？エルフが敵だという教えはあってもね。・・・それも事実か怪しいところですが。」

「アネットさんは確かに人間ではないでしょう。ですが、その事がアネットさんがあなたに今までしてくれた事と関係があるのですか？アネットさんがヴァンパイアだと、あなたへの優しさが嘘になるのですか？」

エレオノールはその言葉に愕然としていた。それは真理であった。

『殿下の仰る通りだわ・・・アネットが吸血鬼、ううんヴァンパイアだったからといって、優しく、本当に尽くしてくれるメイドであることは変わらない。』

「殿下。・・・ありがとうございます。仰る通りです。アネットがヴァンパイアであることはショックでしたけれど、それは関係ありません。アネットはアネットです。そうよね、カトレア。」

「ええ、エレオノール姉様。人間でも、ヴァンパイアでも。アネットはアネットですわ。・・・ラファエル殿下、ありがとうございます。す。」

「私は別に何も・・・あなた方の心の持ち様です。・・・アネットさん？ いい加減、そのバカの手を離してもいいんですよ？」

ゴードはチーズが名産なんですよ、などと訳の分からない話をして、いるエンゾに握られているアネットの手を指し、ラファエルが言う。

ウルスラがチャキ、と音を立て杖剣に左手をかけた。それを見て慌ててアネットの両手を離れたエンゾに対し、軽く会釈をし、アネットはラファエルを見つめる。

「一件落着ですかね。そもそも、ウルスラも悪い。まあ、何も考えなくて言ったんだろうけど？」

「ちょ、殿下！？ 何か私の扱いが悪くないですか？」

「だってウルスラ、純粋に珍しいって気持ちだけで言ったんでしょ？ 偏見とかじゃなくて。」

「はい。それが何故アネットさんがヴァリエール家を出て行くなんて話になったのか・・・」

「ホラね。だ、そうですよ公爵。それに皆様方。これが脳筋というやつです。」

呆けていたアネットが慌てて頭を下げる。

「あ、ありがとうございます！ううう・・・」

「殿下、寛大な処置を有難う御座いました。」

また泣き出してしまうアネット、頭を下げるヴァリエール公爵。アネットを見て涙ぐむカリヌ夫人を始めとするヴァリエール家の女性達。

「ですから、何もしてませんよ。まあ、とても楽しい話も聞けましたし。今日は良い日でした。・・・ふあ、眠くなってきた・・・」

「殿下。湯浴みしたくないからといって、眠そうなフリをしても、そうは行きませんよ。」

「ウ、ウルスラ、人聞きの悪い事を言うな！」

ヴァリエール公爵は内心、舌を巻いていた。これで、労せずしてネーデルラント王家はヴァリエール公爵家に対し大きな恩を作ったことになる。意図してはいなかったとしても。

しかも、潔癖症なところがあつたエレオノールを変えてしまった。とても3歳の子供とは思えない知識、説得力。この小さな賢王子とは、今後は長い付き合いになりそうだ。そう思った。

「殿下は湯浴み嫌いなのですか？でしたら私達とご一緒は如何ですか？ねえ、姉様。」

「え！？そ、そうね。殿下はまだ3歳だし・・・ブツブツ」

「それは良い考えですね。ね、殿下？」

「うっ」

その嫌そうな顔を見て、やはりまだ子供かな？と少し認識を改めた公爵であつた。

金盾とヴァリエール家のヴァンパイア（後書き）

”人間兵器”ウルスラにとっては、人間とヴァンパイアを見分けることなど朝飯前です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2826ba/>

ネーデルラントの覇王

2012年1月9日04時53分発行